

雨上がりの川

森沢 明夫 作

(160)

オカヤイツミ 画

第六章 それぞれのモノローグ(16)

【紫音の話】

「紫音さん、あの後、約束してくれましたよね?」

「え、約束?」

「わたしの能力を、開花させてくれるって」

「あ……」たしかに、うつかりそんなことを言ってしまった覚えがある。「そうね、うん」

「あれ、お願いしても、いいですか?」

「え……、いま?」

春香は、少し姿勢を正して「はい」と頷いた。

「いま、か……。まあ、うん、できないことはないんだけど」

「けど?」

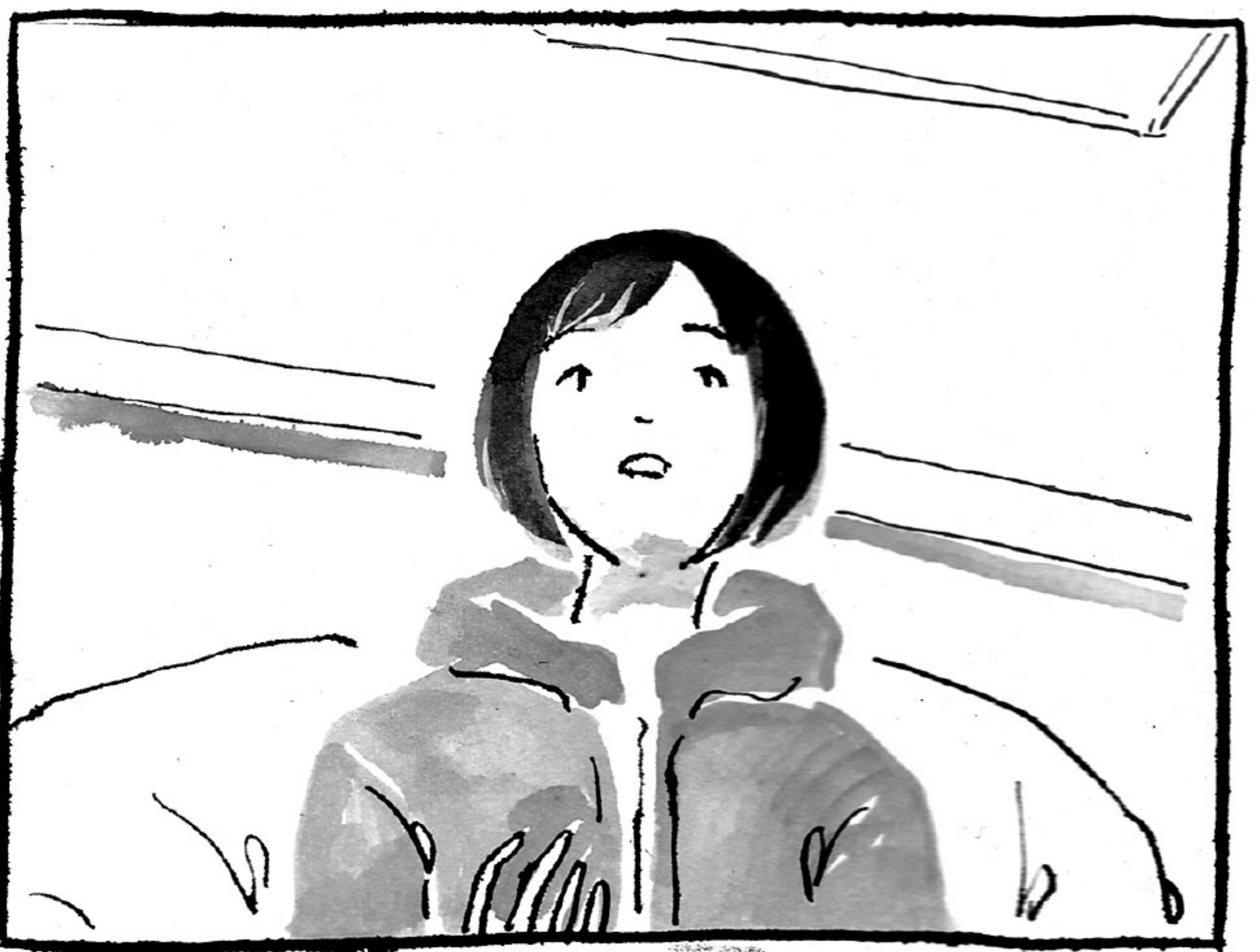
と、春香が小首をかしげる。

「正直、まだ年齢的に、ちよつと早いかなくて」

「え……、駄目、ですか」

分かりやすいくらいに、春香は肩を落とした。

「あ、いや、駄目というかね、うーん……。そもそも春香ちゃんは、どうして霊能力が欲しいと思うの?」



「えつと」春香は口に手を当てて考えると、少し声のトーンを落として答えた。「自分を変えたいから、かも……」

「なるほどね。じゃあ、自分をどんな風に変えたいの状況とか、いろんなことを変えられたらいいなって」賢い春香にしては、いまいちが絞れていないような受け答えをした。でも、それも仕方がないだろう。この娘はまだ中学生だし、いじめで心に傷を負わされ、不登校をしている真っ最中なのだ。

「漠然と自分の在り方を変えたい。そのために霊能者になりたいってこと?」

「はい。そんな感じかも……」

どこか自信なさげに頷いた春香。

「そっか。でも、一応、言っておくとね、わたしみたいにこの能力を持つちゃうと、それはそれで大変なのよ」

「どんな風に、ですか?」

「うーん、例えばね、信頼していた人の心のなかにドス黒い部分が見えちゃって、すごく悲しくなることもあるし、大好きな人が秘密にしている悲しい未来や過去が見えちゃったりもするわけ。こういうのも、すごく胸が痛くなるんだよね」